

最初は恐るおそるだった手の動きが次第に大胆に、そして淫らさを増してきた。

「ヤン、耕ちゃんの触り方、エッチだよー。あつ、やだ、そこ、やあん！」

スリッパ越しにしこった乳首をいじられた瞬間、夏純の背中にぞくぞくとしたものが駆け抜けた。自慰で得られるものよりもずっと激しく鋭い快感に、股間が潤むのが自覚できる。

「ねえ、直接お姉ちゃんのおっぱい、触って……」

夏純は自らスリッパを捲りあげ、すっかり尖った乳首を曝けだした。淡い色をした乳輪がわずかにふくらんでいる。

目の前に差しだされた生の乳房に、耕太は指をめりこませんばかりにむしゃぶりついてきた。白い柔肉が弟の手によってくにゅくにゅと形を変えていく。

「ああつ、耕ちゃん……あつ、はああん！」

弟に愛撫されるといって倒錯した快楽に、夏純の口からは甘い声しか聞こえなくなる。「おっぱいばかりじゃやだよー……ね、こっちも触って？」

より大胆さを増した夏純は、弟の手を自らの股間へとあてがう。スリッパとお揃いのシルクショーツ越しに耕太の体温が秘部に伝わる。

「あつ……やだ、恥ずかしい……ああつ、耕ちゃんに触られてるよお」

「ああ、お姉ちゃん……すごい、ここ、濡れてる……っ」  
姉の女陰の潤みをシルク越しに感じ取った耕太がそう告げる。興奮と驚きで声が震えていた。

「だって、だって……耕ちゃんがあんなにおっぱいいじるから……っ……はああ、ダメ、お姉ちゃん、どんどんエッチになっちゃう……はああ、あはっ！」  
今までに感じたことのないくらい激しい快感に、夏純の下半身から力が抜けていってしまう。

「お姉ちゃん、濡れてる……お姉ちゃんのココ、どんどん湿ってきてるよ！……」  
いつしか耕太は夏純と体を入れ替え、姉を積極的に追いたてていた。

「ダメえ……やあつ、そこ……ああ、はあっ！」  
じつとりと湿ったショーツの底を弟にいじられながら、夏純は軽く達してしまふ。痺れるほどに尖った乳首が耕太の胸板と擦れるたびに、泣きたくなくなるような悦びが背筋を駆けあがっていく。

しかし、若い耕太がこれくらいで満足するはずもなく、  
「ひっ……ひいん……耕ちゃ……ああつ、ダメ……あつ……ひゃうツ」  
興奮に汗ばんだ手がショーツのなかに潜りこんできた。



「ダメよ、いきなりなんて……はああっ！」

やや濃いめのヘアをかき分け、耕太の指が夏純の肉裂に到達する。

(やだ、耕ちゃんの指、アソコいじってる……っ)

自分から誘ったのだから当然覚悟はできているが、秘所をあからさまに濡らしていたことを知られるのはやはり恥ずかしかった。

「お姉ちゃんのココ、あつたかい……それに、いっぱい濡れてるよ」

「ああん、そんなこと言っちゃやだよー……あつあつ……耕ちゃんの指、イヤらしいのお……やだやだ、そんなにいじつたら、おかしくなっちゃうう！」

熱く潤んだ肉唇を弟の指で触られるたびに、くちゆくちゆと湿った水音がたつのがたまらなく恥ずかしい。

(どうしよ、私、弟にエッチなことされて感じてるよ……ああん、恥ずかしいのに、でも、もつと触ってほしくなっちゃう……)

次々と溢れてくる愛液が耕太の手のひらに達する頃には、もう夏純の腰から下にはまったく力が入らなくなっていた。

「お姉ちゃん、大丈夫？……」

こんな状況にもかかわらず、自分の身を案じてくれる弟がとても愛おしい。

「うん……耕ちゃんに触られて、気持ちよくなりすぎちゃったよ……えへへ」

身体を横にずらし、ちょうど耕太と並んでおお向けで寝るような体勢になった。

「お姉ちゃん……っ」

半身を起こした耕太は、艶やかに紅潮した姉の顔と肢体を見て生唾なまよばを呑みこんだ。弟の視線が自分の胸や股間に注がれているのを感じる。

（耕ちゃん、私の裸に興味あるんだね。でも、見てるだけでいいの？ お姉ちゃんのこと、もつともつと好きにしているんだよ？……）

熱っぽいまなざしで愛しい弟の瞳を見つめる。耕太もまた、同じような熱い瞳で夏純を見つめかえしてくれた。

もう、言葉はいらなかつた。

耕太の顔が近づき、夏純の唇をふさぐ。

どちらからともなく舌を伸ばし、互いの唾液を啜すすり合う。

夏純が耕太の首に両手をまわすと、耕太も夏純の身体を優しく抱きしめてくれた。

「んん……っ……んふ……ちゅぷ……」

静かな部屋に姉弟の生々しいディーブキスの音と、苦しげな呼吸音が響く。

舌を絡め合いながら、耕太の手が再び夏純の秘部へと伸びてきた。